

【講演 3】

演題：「オープンソースの図書館システム『Enju』について」

講師：さいたま市立中央図書館 大木 隆志氏

【講演概要】

1 プロジェクトの立ち上げ

Enju の開発母体となった Project Next-L は、大学図書館問題研究会をはじめ現状の図書館システムへの問題意識を持つ人々を中心に平成 18 年に設立された。私も、たまたま知己のあった政令指定都市の図書館長より Project 発足の話聞き、参加を決めた。

当時の図書館では概して Web-OPAC 上には情報量が少なく、Amazon 等と比較しても魅力に乏しかった。もっともこの状況は今もあまり変わっていない。しかし、図書館側も「図書館のシステムなんてそんなもの」と思っていた。

そのような状況を変えられないかと Project Next-L は、まず理想の図書館システムを考えることからスタートし、日本の図書館システムの共通仕様を作ろうということになった。

当時から、図書館システムはベンダー先行のため、図書館員が必要とする機能が実装されているのかは疑問であった。

あるいは、実装されていてもそれは「カスタマイズ」という形であって、各自治体によってばらつきがあった。

まず、図書館員の理想とするシステムの使用を作ろうとしたが、なかなか、意見は集まらず、苦勞をした。結果として、メンバーの中にプログラム言語のわかる人間がいたことから実際に図書館システムを作ってみようということになった。



大木 隆志 氏

2 Enju の特徴

現在、Enju は Root、Leaf、Flower の 3 タイプのモジュール化されたシステムの構成となっている。

Root は目録システム、Leaf は貸出システム、Flower は、利用者向け蔵書検索システムとなっており、特に Flower は、既存の図書館システムの Web-OPAC 機能に取って代わることを前提に開発されている。

モジュール化されていることで、それぞれ必要な部分だけの導入も可能である。

また、オープンソースのソフトウェアであり、稼働のための OS 等についても無償で提供されているものを組み合わせることで稼働できる。

既存のベンダーの提供する図書館システムにおいては、書誌情報をはじめとするデータは本来図書館側の所有物のはずなのに、PC から抜き出すのはベンダーの都合に左右されてしまう。

オープンソースにすることで、そういった点でも自由に図書館側がデータを容易に使用できるようにすることを目的としている。

また、Enju ベースの図書館システムをオリジナルで開発することも可能であり、メーカー側の新規参入の敷居が下がるのではないかと考えた。

さらに、Enju は MARC を購入しなくてもよいシステムというのが大きなメリットの一つとしてあげられる。

NDL-OPAC からデータを取り込む機能により、MARC の購入と言う費用負担が軽減されるため、比較的安価に導入することが可能である。これは、小・中学校のような学校図書館への導入も想定しているからである。

それに加えて、Enju の目録システムは、IFLA において策定された FRBR に対応しているが、日本国内の公共図書館での FRBR 普及にはまだ相当の時間がかかることから、FRBR への対応現時点では公共図書館にとってあまり重要ではないと判断し、結果として Enju は Root、Leaf、Flower に枝分かれした。

導入に当たっての問題点としては、インターフェイスが既存の図書館システムとは異なることから、既存のシステムを使用しているユーザーには利用しにくいかもしれない。

また、マニュアルが整備されていないことから、操作を模索するという場合が多く、他の図書館システムと比較すると大きな弱点といえる。

他にもプログラムを書ける人が少ないことや、現場の図書館職員から「図書館システムがこうあってほしい」という情報が少ない。

三菱総合研究所のクラウド型図書館システムは、Enju をコアシステムとして採用している。（※）

※講演者の意向により、冊子体で刊行されたものと表現が一部異なります。

3 おわりに

賃貸借契約の更新による機器の入替の際に、図書館システムの更新も同時に実施されることになる。ハードの調達、ソフトの調達、それぞれの保守が別個に、例えば、ブラウザ上で動くシステムであれば、ハードが変わってもソフトウェアは変わらないことが可能で、自分たちがソフトウェアに手を入れながらより使いやすく育てていけると思う。

電子図書館もクラウドで実現される現状もあるということは、図書館システムを切り分けたり、別のシステムと連動させたりして利用できるのではないかと思う様になった。

このようなメリットも考えながら、今後の開発に当たっていきたいと考えている。